高校生の非行抑制要因
に関する研究

平成11年3月

非行抑制要因研究会

財団法人　社会安全研究財団助成研究

はじめに

本研究は非行を抑制している要因を明らかにすることを目的にする。抑制という言葉は日常的にも広く用いられているが，心理学の辞典によると「自分の言動について抑制や罰など好ましくない結果が予想されるとき，それを表現しないように抑えること。攻撃や怒りの表現は抑制されやすい。道徳規範との抵触などで思考や願望自体が無意識的に抑えられる場合を抑制という」（古畑和孝編　社会心理学小辞典），「精神的・生理学的な機能が他の機能にブレーキをかけ，その実現をさまたげること」（宮城音弥編　心理学小辞典）「制止，禁止ともいう。抑える，生じさせない，止めさせる，妨げる，さえぎる，はばむなどの作用。疲労などとは異なり，それ自体が独自の構造をもつ積極的過程と考えられる」（北村晴朗監修　心理学小辞典）のように説明されている。神経生理学や学習心理学でも用いられている概念である。

われわれの日常の行動を考えてみると，

1）やりたいからやる

2）やりたくないからやらない

3）やりたくないがやる

4）やりたいがやらない

の4つのどれかにあてはまることが多い。幼い子どもの生活はほとんど1）か2）である。加齢にともなってやりたくないけれども，自分の義務として，あるいは職責上やらなくてはならないことが増加する。本研究で問題とするのは4）のは場合である。

「悪い」ことにはおもしろい面がある。スリルがある，金品が容易に入手できる，屈折した気分が発散できる，仲間に結果を誇示できるなどの諸点である。これは悪いことを促進するように働く。しかし悪いことにはそれをなした結果として，たとえば社会的制裁を受ける，信用を失う，健康を損なう，自分のプライドが傷つく，親が悲しむ，他人の心を傷つけるなどが予想され，これはブレーキのような制止的な役割を持っている。

悪いこと，少なくとも好ましいことではないと承知していても，それをなしたときに得るものが大きい，自分だけやっているのではない，発見されることはないだろうという要因が強くなると，抑制する力は弱くなって非行が具体化することになる。

「青少年白書　平成10年度版」によると，青少年の非行は平成5年頃にくらべ比べて最近は増加の傾向があるといわれている。非行を誘発し，非行へと駆り立てる要因には多くのことが考えられるが，すべての青年が非行にはしるのではない。非行へと仲間から誘われてもそれに応じないものもいる。本研究は，この非行を抑制している要因にはどのようなものがあるかを明らかにしたいと考えている。非行は悪いことと一般には言われているが，悪いことの内容や，それをなぜ悪いことと考えるかについては個人差のほかに世代間の差も大きいと予想される。

非行抑制要因研究会　代表　　詫　摩　武　俊

目　　次

はじめに …… 1
第1章　調査の概要 …… 2
1．調査の目的 …… 2
2．調査の方法 …… 2
3．調査の時期 …… 3
4．調査対象者 …… 3
5．調査内容 …… 4
第2章　援助交際についての先行研究 …… 5
1．「モノグラフ・高校生・援助交際」 …… 5
2．「援助交際に対する女子高校生の意識と背景要因」 …… 8
第3章　結果1．　質問紙調査を中心に …… 11
1．「悪いこと」についての悪さの程度の男女別評定 …… 11
2．因子分析による検討 …… 18
3．援助交際について …… 24
4．かつあげについて …… 27
第4章　結果2．　面接調査を中心に …… 28
1．面接調査の概要 …… 28
2．これまでにした「悪いこと」について …… 29
3．「悪いこと」についてどう考えるか …… 30
4．かつあげについて，これをしなかった理由 …… 31
5．援助交際について，これをしなかった理由 …… 31
6．家庭環境，親子関係 …… 34
第5章　まとめ …… 35
1．高校生の考える「悪いこと」について …… 35
2．援助交際をどう考えるか …… 36
3．かつあげをどう考えるか …… 37
付表 …… 38
1．質問紙調査票 …… 38
2．「悪いこと」に関する因子 …… 45

第１章　　調査の概要

１．調査の目的

本研究は非行抑制要因に関する研究である。非行をひとつの行動と考えると，それを駆動させる要因とそれを抑制する要因とがある。店頭に並んでいるパンを盗もうとするとき，腹が空いている，お金がない，誰も見ていない，盗んだことを友だちに自慢しよう，などというのが非行の実行を促す要因である。これに対して盗むのは悪いことだ，盗んで見つかり，学校や親に通告されたら困る，パンを買うお金を持っている。だから盗む必要はない，などというのが非行を抑制する要因である。

一口に非行といっても，その内容や程度は多様である。

かりに高校生を例にして述べれば，高校生の大部分が悪いことと自覚せずに，あるいはごく軽度の悪いことと思って行なっていることもあれば，悪いと自覚しつつ行なうこともある。行なった後で心の痛みを感ずることもあれば，感じないこともある。また同じ行動をＡはあえて実行し，Ｂはやりたいと思っても実行しないということもある。同じ世代に属する人相互感の個人差，性差のほかに，世代間の差も著しいと考えられる。

非行を行なったものについてはその内容，程度，動機などについて多くの研究があり，調査もなされている。しかし非行行動をしなかったものについては，それが表面的な行動ではないため研究や調査の対象にはなりにくい。

筆者らが計画した研究は非行をしなかった原因がどこにあったかという問題である。同世代のものが非行または逸脱した行動をしているのに，それを抑止した理由は何かを解明しようとするものである。

非行といわれている行動をしなかったのは，しょうか止めようかと迷った末にあえてしなかったという場合もあれば，親に恥をかかせてはならない，良心が許さなかったからしなかったということもあろう。勇気がないので恐ろしかった場合もあろう。自分の心にブレーキをかけさせるのはどんな要因なのかということを，本研究は明らかにしたいのである。これは決して単純な問題ではない。本人の生育環境，親との関係，本人自身の性格，友人関係などさまざまなことが考えられる。

非行の原因や経過，直接の動機や社会的背景についての研究は少ない。非行の抑制要因の研究が進めば，これは青少年の非行を防止するためにも，家庭教育，社会教育の内容を考える上でも意義のあるものとなるであろう。

２．調査の方法

本研究は非行の抑制要因を解明することを目的とする。そのため研究は大きく２つに別けられる。

第１は105項目の，いわゆる悪いこと（社会的にみて好ましくないこと）のそれぞれについて，どの程度悪いと思うかを評定し，悪いとされる行動の因子分析，〝悪さ〟の順位づけを行なうことである。またいわゆる援助交際とかつあげについての経験や，それらに対する所感も求めた。

第２は個別の面接である。質問紙調査の末尾に面接調査に応じてもよいと答えたものの中から，男子学生，女子学生40名あまりを選び，１時間乃至１時間半をかけて個別の面接調査を行なった。面接の内容は各自がどんなことを悪いと考えているか，今までにどんな悪いことをしたか，さらに援助交際，かつあげについての経験や所感について，できるだけ詳しく聴取した。

３．調査時期

調査の実施は平成11年１月　３回に分けて実施した。対象者はいずれも埼玉県Ｔ大学の学部学生である。

４．調査対象者

対象者（有効回答者）753票の性別，年齢などの基本的属性は次の通りである。

性別（標本数753）　　男269（35.6%）　　女484（64.3%）

年齢（標本数753）

18 歳：　32（4.2%）	19 歳：160（21.2%）	20 歳：127（16.9%）
21 歳：142（18.9%）	22 歳：195（25.9%）	23 歳：　71（ 9.4%）
24 歳：　17（ 2.3%）	25 歳：　 8（ 1.1%）	26 歳：　 1（ 0.1%）

学年（標本数753）

1 年：227（30.1%）	2 年：125（16.6%）
3 年：114（15.1%）	4 年：287（38.1%）

国籍　　日本（標本数752）

出身高校（標本数752）

国公立　507（67.4%）　　私立　245（32.6%）

出身高校の学科（標本数751）

普通科：703（93.6%）　工業科：3（0.4%）

商業科：5（0.7%）　その他：40（5.3%）

中学卒業時の居住地（標本数748）

東　京：160（21.3%）　横　浜：12（1.6%）

名古屋：3（0.4%）　京　都：1（0.1%）

大　阪：4（0.4%）　神　戸：0

福　岡：1（0.5%）　仙　台：3（0.4%）

札　幌：1（0.1%）　その他の県庁所在地：105（14.0%）

○その他の市：327（43.6%）　○町：106（14.1%）　○村：25（3.3%）

集計に入る前に次のものを除外した。回答項目の3分の1以上が空白のもの，明らかに手抜きとわかるもの，年齢が27歳以上のもの，国籍が日本以外のもの，除外した票は約30であった。

5．調査内容

調査票はまず詫摩が第一次の案として高校生が行なう「悪いこと」のリストをつくり，鈴木乙史，清水弘司，松井豊がそれぞれ意見を述べ調整した。さらに内山（1992），安藤・斎藤・藤田（1997）らの先行研究を参考に，高校生が行なう「悪いこと」の概念を収集，整理した。その結果，①非行（犯罪行為），②不良行為，③性に関する行為，④有害環境との接触，⑤規律違反，⑥マナー違反，⑦公共の場での迷惑行為，⑧周りの人との調和を乱す行為の8つの概念を設定した。これをもとに質問項目を収集，作成し，105項目を選択した。

この105項目について，高校生が行なった場合と，どの程度「悪い」と考えるかという質問を設け，6件法で回答を求めた。回答は「非常に悪い」を6点，「かなり悪い」5点，「どちらかといえば悪い」4点，「どちらかしいえば悪くない」3点，「ほとんど悪くない」2点，「全く悪くない」1点で得点化した。この過程においては東京国際大学の大学院生数名と青山教育研究所の天羽幸子の協力を得た。

調査用紙のフェイスシートには次の項目の記入を求めた。性別，年齢，学年，国籍，出身高校（国公立，私立），出身高校の学科（普通科，工業科，商業科その他），中学卒業時の居住地（9大都市，その他の市，町村）。

調査は無記名で行なった。しかし調査用紙の末尾に1時間程度の面接をしたいので，これに協力してくれる人は住所，氏名，電話番号の記入を求めた。

第２章　援助交際についての先行研究

１．「モノグラフ・高校生・援助交際」

本研究の主要な問題のひとつは援助交際に関することである。

援助交際ということばがマスコミで取り上げられるようになったのは1996年の秋である。この問題についての先行研究としてまずベネッセ教育研究所が1998年に発行した「モノグラフ・高校生 '98, vol.52, 援助交際」をあげることにする。調査者は深谷和子（東京学芸大学教授）ら３名である。

調査対象は東京と埼玉の公立高校生（主として２年生，３年生）1726名（男子858名，女子868名）で，調査は1997年６月から７月になされた。学校のレベルを上，中，下と３つに分けて，それぞれ４校ずつ12校である。調査結果の主な点は次の通りである。

１）1996年に東京都生活文化局が行なった青少年調査の中に援助交際体験者４％という数字がある。これを提示して判断を求めたところ「もっと多いだろう」は男子，女子とも約40％，「この程度だろう」は男女とも約50％で「４％より少ないだろう」とみる生徒は10％にすぎない。

２）「クラスに援助交際をしている生徒がいると思うか」の問い対し，東京の女子は「実際にいると思う」6.3％，「もしかしたら，いるかもしれない」47.9％，「ぜんぜんいないと思う」45.8％で，埼玉の女子より数字が大きい。男子は女子よりも「実際にいると思う」と思っているものが多い。学校差も認められる。「実際にいると思う」は上位校に少なく，中位校，下位校に多い。

３）「テレクラに電話をしたことが一度でもある」ものは男子の10％に対し，女子は35％に達する。学校差が大きく下位校の女子では「かなり利用した」というものが23％もいる。

４）援助交際について　この言葉は愛人バンクが流行したときに経営者が取締り逃れに使用したものといわれているが，実態は「売春」に近い内容をいみするものと考えられる。売春という言葉のもつ暗いイメージを少なくしている。しかし援助交際にも食事やお茶をともにすることも含めて考えることもあり，曖昧な面も残っている。そこでその内容について尋ねると，次のようになる。

	女子	男子
1．ほとんどの子がセックスまでしていると思う	13.0%	22.1%
2．6，7割の子がセックスまでしていると思う	25.4	23.3
3．半分くらいの子がセックスまでしていると思う	36.8	29.4
4．セックスしてない子の方が多いと思う	24.8	25.2

ほとんどの子がセックスまでしていると思っているものは男子に多いが，男女ともに約¼はセックスまでしていないのではないかと考えている。

5）援助交際をしようと街で声をかけられた体験は25%の女子がもち，友だちに誘われた体験も8%あまりが持っている。これは下位校に多く，埼玉より東京に多い。

援助交際の体験が一度以上ある女子は4.4%，2年生より3年生に多く，上位校，中位校より下位校に多い。埼玉より東京に多い。援助交際は大都市の問題なのである。

援助交際を「絶対しない」と言い切るものは70.4%である。「もしかしたらするだろう」は6.7%（この中にはすでにしたものも含まれる），「多分しないだろう」が22.9%である。全体の3割は経験をもつか，多少ともその準備状態にあると解釈できそうである。誘われたり，勧められたり，お金を欲しくなれば援助交際にはしる可能性を持っている層とも考えられる。ここにも学校差が認められ，上位校より下位校に多い。また成績との関連も明瞭で，成績「上」のものは88%絶対しないと言い切っているが，「下」のものではそれが57%程度である。

6）援助交際観

殺人，強盗，詐欺，放火などについて良いことか悪いことかと聞かれたら大多数の者は悪いこととこたえるであろう。ところが売春，さらに援助交際について聞くと，それは恥ずべき行為ではあっても悪い行為ではないという考え方をするものがいる。これらは誰にも迷惑をしていないし，本人も相手もいいのだから非難すべきではないという考え方がある。この考え方，（つまり援助交際は当事者たちが納得していて他に迷惑をかけていないのだから非難すべきではないとの考え方）についての賛否を問うと，男女とも約6割弱は「そう思う」と答え，4割強が「そう思わない」と答えている。そう思うの中には「とてもそう思う」，「わりとそう思う」，「少しそう思う」の3つの段階があるが，それらを合わせて6割に近い高校生は援助交際について許容的な考え方をしている。学校差が認められる。許容的な考え方をするものは上位校，中位校では56%から57%であるが，下位校では71%になる。

7）援助交際と他の行為との比較

援助交際がほかの行為と比べて，どのくらい悪いかをこの調査は検討している。表1の8つの項目それぞれについて，どのくらい悪いことかの判断を求めている。援助交際は男子，女子とも「とても悪い」と思っているものが多い。この点について学校差が認められ，下位校になるにつれて「悪くない」と思うものの比率が増加している。項目間には性差が認められる。たとえば援助交際，テレクラでのアルバイト，無断外泊を「とても悪い」とするものは女子に多いが，ナンパしたりされたりすることは男子の方に多い。このことを悪くないとみる女子は7割に近い。

表1．高校生としてどのくらい悪いことか

%

	女子			男子		
	とても悪い	少し悪い	悪くない	とても悪い	少し悪い	悪くない
1．援助交際をする	69.1	22.9	8.0	54.6	28.4	17.0
2．テレクラでアルバイトをする	56.4	33.6	10.0	44.4	34.6	21.0
3．たばこを吸う	44.8	40.4	14.8	38.3	37.7	24.0
4．無断で外泊する	30.1	59.0	10.9	15.5	55.0	29.5
5．パチンコをする	16.6	47.1	36.3	20.4	39.0	40.6
6．友だち同士でお酒を飲む	10.3	45.4	44.3	18.9	39.4	41.7
7．アダルトビデオを見る	9.7	25.3	65.0	6.6	18.5	74.9
8．ナンパしたりされたりする	7.0	24.4	68.6	11.3	27.2	61.5

表2．援助交際は高校生としてどのくらい悪いことかについての学校差及び成績との関係

%

		女子			男子		
		とても悪い	少し悪い	悪くない	とても悪い	少し悪い	悪くない
学校のランク	上位校	66.4	27.0	6.6	50.8	32.8	16.4
	中位校	67.5	21.4	11.1	50.0	36.9	13.1
	下位校	61.2	26.6	12.2	50.5	19.8	29.7
成　績	上	78.0	13.0	9.0	51.7	27.0	21.3
	中の上	70.8	23.6	5.6	59.3	24.8	15.9
	中	73.0	20.9	6.1	50.0	37.3	12.7
	中の下	59.7	31.6	8.7	60.1	26.6	13.3
	下	62.1	24.8	13.1	52.4	23.8	23.8

8）高校生の援助交際がいけない理由

高校生が援助交際をすることがどの程度，悪いことかと聞くと，女子高校生の69%，男子高校生の55%は「とても悪い」と考えている。「少し悪い」と考えているのが女子で

23%，男子で28%である。次に「世間で援助交際がいけないこととされている理由」を尋ねたのが表3である。肯定率がもっとも高いのは男女とも「将来，好きな人ができたときに後悔する」で，女子は67.5%が「とてもそう」だと答えている。これに対して「道徳に反する」からいけないという理由を肯定するものは男女ともに少ない。現在の高校生たちの考え方の一端を知ることができる。

表3．高校生の援助交際がいけない理由

%

	女子				男子			
	とてもそう	わりとそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない	とてもそう	わりとそう	あまりそうでない	ぜんぜんそうでない
1．将来好きな人ができたとき後悔する	67.5	23.0	8.0	1.5	44.0	34.2	15.1	6.7
2．気持ちがすさむ	44.5	41.6	11.9	2.0	37.1	41.4	15.0	6.5
3．犯罪に巻き込まれる可能性がある	40.2	38.1	19.6	2.1	38.3	37.8	18.3	5.6
4．金銭感覚がマヒする	36.7	42.9	16.9	3.5	32.9	38.6	19.0	9.5
5．異性とふつうの感覚でつきあえなくなる	34.7	40.4	20.8	4.1	35.8	37.7	19.4	7.1
6．道徳に反する	28.8	46.2	21.4	3.6	32.5	37.3	22.3	7.9

以上は「モノグラフ高校生」に述べられた研究の一部である。この高校生を対象になされた調査は規模が大きく，また包括的で「援助交際」に関する諸問題を詳しく検討し，分析を加えている。

2．「援助交際に対する女子高校生の意識と背景」

もう一つの先行研究は，福富　護（東京学芸大学教授）によってなされたものである。

彼は「女性のためのアジア平和国民基金」より「援助交際に対する女子高校生の意識と背景要因」という報告書を刊行している。女子高校生600人より得た結果の一部を個条書きにして述べると次のようになる。

1）援助交際を「金品と引き換えにお茶やデートをすること」，「金品と引き換えにセックス（性交）以外の性的行為をすること」「金品と引き換えにセックスをすること」とに分け，これらの具体的行動に対して，当該女子高校生自身と，本人以外の女子高校生のな

した場合の２つにわけて，どの程度抵抗感を感ずるかを「抵抗をかんじる」から「全く抵抗を感じない」まで４件法で回答を求めた。
「セックス」や「セックス以外の性的行為」に対する抵抗感は強いが，「お茶やデート」に対しては許容的である。

２）自分以外の他の女子高校生の行なうことに対して抵抗を感ずるのは「お茶やデート」46%，「性交以外の性行為」74%，「性交」84%ある。自身が行なう子とに対して抵抗を感じるのは「お茶やデート」64%，「性交以外の性行為」84%，「性交」88%である。

３）「援助交際」の経験者は，内容別にみると「お茶やデート」は29人（4.8%），「性交以外の性行為」は14 人（2.3%）「性交」は14人（2.3%）がありと答えている。これらの３つのいずれかを経験しているものは30人（5.0%）となる。

４）援助交際に対する抵抗感の強いものや，経験のないものは親への愛情や信頼が高い。また経験のあるものは「自分の家庭がイヤだと思うこと」が多い。

５）援助交際経験者は学校環境に関して「ついていけない」を多く選択している。

６）友人の関係については，経験のあるものは友人に対する同調や自己開示の傾向が強い。また友人から経験談を聞くことも多い。ひとつのグループがつくられていて相互に影響し合っている様子がある。

７）経済的環境，家庭環境の貧しさや小遣いの少なさは「援助交際」の直接的な原因になっていない。むしろ自分の持ち物や服が「いい」ものであるかどうかという相対的な貧困観が「援助交際」の基本的な動機といえる。

８）援助交際の経験のあるものの特徴として，将来のことに対する無関心さ，享楽主義，自己存在感のなさなどが認められる。学校もおもしろくなく，家庭にも満足感がなく，何となく空虚な毎日の生活の中で，ひとりの人間として他者に求められ，あまり苦労せずに現実を楽しく過ごしたいという気持ちが援助交際に向かわせていると考えられる。加齢不安といって，いつまでもできるだけ若くありたいと，歳をとるのはいやだという気持ちがある。女性の価値は若さにあるという考え方である。将来に向かってどう生きるかと考えるよりは若い今をできるだけ楽しく暮らしたいと思う心である。これは現実を安易に享受しようという態度になり，援助交際に向かう基盤ともなるのである。

9）このような考え方はまじめに学業に励み，将来に向かって誠実に生きようとする態度ではなく，家出をしたい，学校をやめたい，シンナーなどを吸いたいと望むことにもなり，飲酒，喫煙，無断外泊，テレクラなどへの接近，親の財布から盗む，万引，ブルセラに下着などを売るという非行や非行に類似した行為に駆り立てることにもなるのである。社会のために何かできることを自分もやろうとする態度とも遠いものである。

以上は福富　護氏の研究の結果の一部である。援助交際にかかわりをもつ女子は全体から見れば，わずかであるが，そのものたちの物の考え方や生活の仕方をこの調査は明らかにしている。